

# 大学生の英語基礎学力向上計画の実践

キーワード：プレイスメント・テスト、英語力、評価

## 高 階 悟

### 1 はじめに

秋田県立大学は、生物・農学系の生物資源科学部と理工系のシステム科学技術学部の2学部で1999年4月に開学した。大学の基本理念は、「秋田県の持続的発展に貢献し、将来を担う優れた人材を育成すること」である。秋田県の基盤産業を担う人材を育てるという趣旨から、推薦入試は秋田県内の高校生のみを対象に実施しており、秋田県内の学生を定員の30%以上を確保する方針で学生募集をしている。

生物資源科学部における秋田県内の高校からの入学者は、推薦入試A・B・Cと一般入試の前期試験と後期試験を合計すると定員(110名)の約40%前後を占めている。このように多様な選抜試験を受けて入学する学生の基礎学力低下や学力の格差が開学2年目あたりから教員の間で問題になってきた。高校での履修内容や履修時間の相違によると思われる学力格差を改善するための対策が検討された。2001年度より、大学全体での学力向上の取り組みとして、主要科目(英語・化学・生物)の基礎講座を初年次に開講している。

秋田県立大学の学生の英語のレベルについて、2001年に英語グループで実施した「英語教育に関するアンケート」の全学調査によれば、学生の85.4%が自分の英語力を高校中級程度(英検準2級程度)と判断していた。また、同アンケートで教員と学生に「本学の英語科目として開講して欲しいもの」を尋ねたら、教員(回答者133名)でもっとも多いのは「基礎英語」(41.4%)であり、次が「総合英語」(39.1%)であった。

学生(回答者913名)でもっとも多かったのは「基礎英語」(29.7%)であり、次は「ビジネス英語」(28.4%)であった。このような背景もあり、一年生を対象にし「英語基礎講座」を大学全体で4年間実施してきた。そこで、平成16年度(2004年)の英語基礎学力向上計画の指導経過とその成果を検証する。

### 2 英語基礎学力向上計画の概要

対象学生：生物資源科学部

平成16年度の入学者

118名：県内45名(38%)、県外73名(62%)

男性55名(47%)、女性63名(53%)

担当教員：専任英語教員、外部講師(元高校英語教師)

英語基礎学力向上計画の第一段階は、12月1日の県内推薦合格者への学習説明会から入学式までの期間である。12月の学習説明会で、英語では入学までの間に自宅で行う自学自習の課題としてCD付きの市販の問題集『大学生の英語入門』(南雲堂)を紹介した。同時に、4月には英語基礎講座の対象者を決定するためにプレイスメント・テスト(placement test)を実施することを告げ、学生の学習意欲を刺激した。

ここで問題にしている英語の基礎学力とは何か。それは、中学卒業程度プラス高校1・2年までの英語学習によって獲得された能力(語彙力・文法力と長文理解力など)であり、基本的な言語操作能力(linguistic ability)である。

県内推薦合格者の入学までの英語学習を手助けするために、秋田県立大学で2月と3月に2

回の英語スクーリングを開催した。スクーリングは外部講師（元高校教員）が担当し、授業の最初に家庭での学習成果を見るために12問の並べ替え小テストを実施し、問題集の解答を解説した。小テストの問題はすべて問題集の本文にある文章からの出題であり、日本語を参考にして単語を並べ替える容易なテストである。

この問題の解答時間は約10分で、1回目のスクーリング受講者23名のテストの平均点は、12点満点の7.8点（65%）でした。12点満点が2人、しかし残念ながら2点が1名、4点が2名いた。この英語確認問題でもっとも正解率（96%）が高かったのは、次の問題でした。

第3問 彼は昨日どこへ行きましたか。

(he, did, where, yesterday, go)?

残念ながら、この問題を間違えた学生が1名いた。次にもっとも正解率（13%）の低かったのは次の問題でした。20名の学生が間違えた。

第10問 冬にこちらではどのくらいの雪が降るんですか。

(do, how, here, much, have, snow, you)  
in winter?

※資料①：「第1回スクーリング英語  
確認問題」

3月実施の第2回目の英語スクーリングの時にも同様に最初に自習の成果を見るために英語確認問題を実施した。結果、平均点は、11点満点の7.1点（64%）であり、第1回目のスクーリングの英語確認問題の結果と同じような傾向が出た。2度の英語スクーリングから、県内の推薦合格者の半数近くが英語の基本的な文章構造が理解できてなく、比較級や現在完了が理解できていないことが分かった。一部の高校生は、問題集を十分に学習してこなかったのではないかと思われた、またある学生は「英語力が中学校レベルからあまり伸びておらず、高校3年間でどれくらい英語を学習してきたのか」という疑問を抱かせるような結果であった。

英語基礎学力向上計画の第二段階は、大学に入学してから夏休みに入るまでの期間である。入学式後に新入生全員に英語教員が独自に作成

したプレイスメント・テストを実施した。この試験は、中学・高校1・2年生のレベルの語彙・文法問題が20問、長文読解が10問、構文・英作文の問題が20問から成る多肢選択法（multiple-choice method）の問題である。プレイスメント・テストの受験者は、117名（1名怪我のため欠席）で、平均点は100点満点の70点で、最高点は93点、最低点が27点、標準偏差値が12.8でした。このテスト40問中もっとも正解率の高かった（99%）のは、次の語彙・文法の問題でした。

第2問 "Would you like some more tea?"  
"Yes,  ."

(1) ok (2) please (3) mister (4) mate

間違って(1)を正解にした学生が1名いた。次にもっとも正解率が低かったのは、文法問題の第17問（25%）でした。(3)を正解にした学生が多く、39%いた。

第17問 "My brother  here by now, for he took the early train.

(1) ought to have arrived

(2) may arrive (21%)

(3) must arrive (4) can arrive

プレイスメント・テストの結果を基にして、58点（偏差値41）以下の25名を英語基礎講座の対象者に決定した。対象者決定の基準は、25名前後の少数規模のクラスが講師と学生の両方のために理想的であるという判断に基づいている。基礎講座受講者の県内と県外の比率は、秋田県内出身者は25名中18名（72%）で、県外出身者は7名（28%）でした。前年（平成15年度）の基礎講座における秋田県出身者の割合は、19名（67%）を占めており、県内出身者、つまり推薦合格者のための基礎講座という意味合いを否定できない面がある。

秋田県内の高校の事情をよく理解し、補習授業の経験豊かな外部講師に、英語基礎講座を一任した。教授法は従来の「文法訳読法」であり、テキストはリーディング教材の『世界はいま』（World Scope、桐原書店）で、基礎的な文法事項が理解できるように構成された「読み、書き」中心のものである。

補習授業的な基礎講座はカリキュラム外の科目であり、単位認定はされないが、英語の苦手な学生は積極的に参加した。注目すべきことは、基礎講座の趣旨を理解して、自ら受講したいと申し出てきた女子学生が2名いたことである。外部講師と私は1ヶ月に一回ごとに会い、基礎講座の出欠状況についての報告を受け、学生についての情報を交換した。基礎講座13回の授業回数の中で半分以上欠席した学生が2名いた。その2名は必修科目のLL Iの授業には出席しており、英語基礎講座への出席を促したがその効果はなかった。

一年生の前期の必修LL Iの授業は、意志伝達行動能力 (communication proficiency) を高めるために「聞き取り、話す」ことを重視した授業である。テキストはLongman社出版の“English Firsthand 1 & 2”であり、高校レベルの英語力で十分に理解できるやさしいものである。但し、1クラスの学生数が59名であり、テキストにあるペアワークやグループワークを十分に指導できなかった部分もあった。学生のテキストの理解度を知るために隔週ごとに学習した基礎単語問題と英語の構文理解を助けるために単語を並べ変える整序問題または英作文の小テストを実施した。さらに、英語の能力が高い学生には宿題として、図書館にある多様なレベル (英検4級から英検1級) の英語副読本Oxford Bookworms library, やHeinemann Guided Readersなどを読み、その本の内容とコメントを記入してブックレポートの提出を課題にした。

※資料②：ブックレポート用紙

LL Iを受講する学生は、最低1枚を提出することにしたが、最も多い学生は4枚のブックレポートを提出し、3枚提出した学生は10名いた。学生はブックレポートで「初めて英語の本を一冊読んで勉強になった。次はもう少し難しいものを読んでみようと思った」などとコメントを書いていた。独力で一冊の英語の本を読んだ楽しさを記述したレポートが目立った。前期のLL Iの評価は、期末試験 (熟達度テスト: proficiency test)、小テスト (日頃の学習成果)、ブックレポート (自学自習の成果)、出欠 (授

業への参加度) それに基礎講座への参加状況などを総合的に判断して「優・良・可・不可」に決定した。前期の期末試験の成績で「不可」の学生には1ヶ月後に再試験の機会を与えた。最終的に4名の学生が前期の必修LL Iの単位を取れなかった。そして、学生は2ヶ月の長い夏休みに入る。

英語基礎学力向上計画の第三段階は、10月から年度末の2月までの期間である。前期のLL Iの授業の成績を参考にして、後期の英語基礎講座の受講者13名を決定し、9月末日にその学籍番号を掲示板に掲示した。しかし、1名の学生は進路変更のために、後期より休学した。後期受講者は、前期の基礎講座の継続組が13名中、12名であり、それに秋田県内の推薦入試の学生を1名追加した。県内出身者の割合は、前期の72%から85%に増え、県外出身者の割合は前期の28%から15% (2名) に減少した。前期と同様に外部講師の元高校教諭に英語の基礎力をつけるように基礎講座を一任した。前期同様に補習授業的なカリキュラム外の科目であるが、自から基礎講座の授業を受けたいと申し出た男子学生が3名いた。ただし、残念ながら、後期の基礎講座11回の授業回数の中で半分以上欠席した学生が2名いた。

後期のカリキュラム上の必修科目はLL IIと学問的英語 (English for academic purposes) 的な総合英語 I である。LL IIはLL Iの延長科目であり、コミュニケーション能力を重視した授業である。総合英語 Iのテキストはナノテクノロジー (nanotechnology) や遺伝子組み換え食品 (genetically modified food) など最新情報を扱った『明日を拓く科学の夢』(Breakthrough, 南雲堂) であり、学生は科学の英語表現に慣れ、専門分野の論文を原書で読む読解力をつけることができる。総合英語 Iはテキストが難しいために授業外の課題はなくし、期末試験、隔週ごと小テスト、出欠状況などを総合的に判断して「優・良・可・不可」の評価をした。総合英語 Iの再試験対象者は5名、再試験の結果2名が単位を取れなかった。最終的にLL IIでは2名、総合英語 Iでも2名の学生が後期の英語の必修単位を取れなかった。

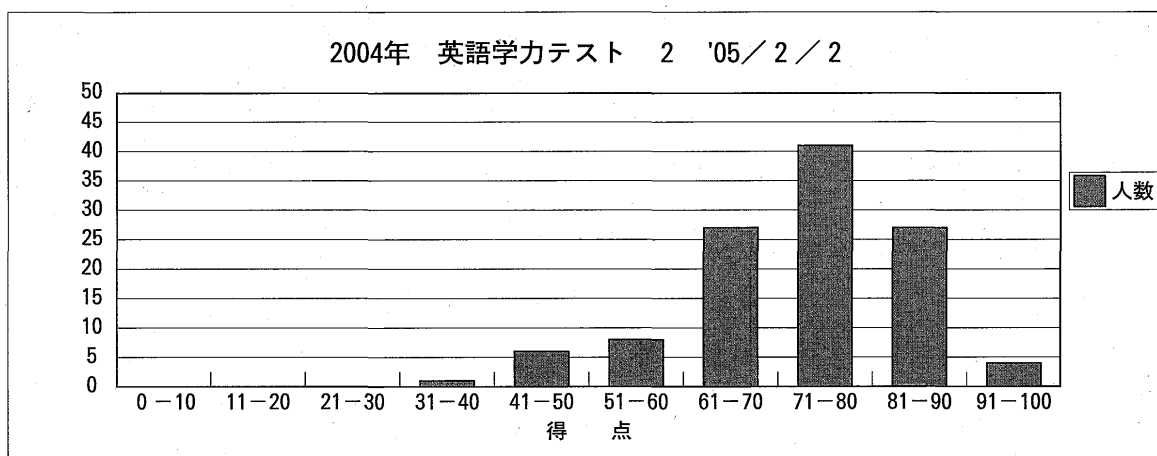
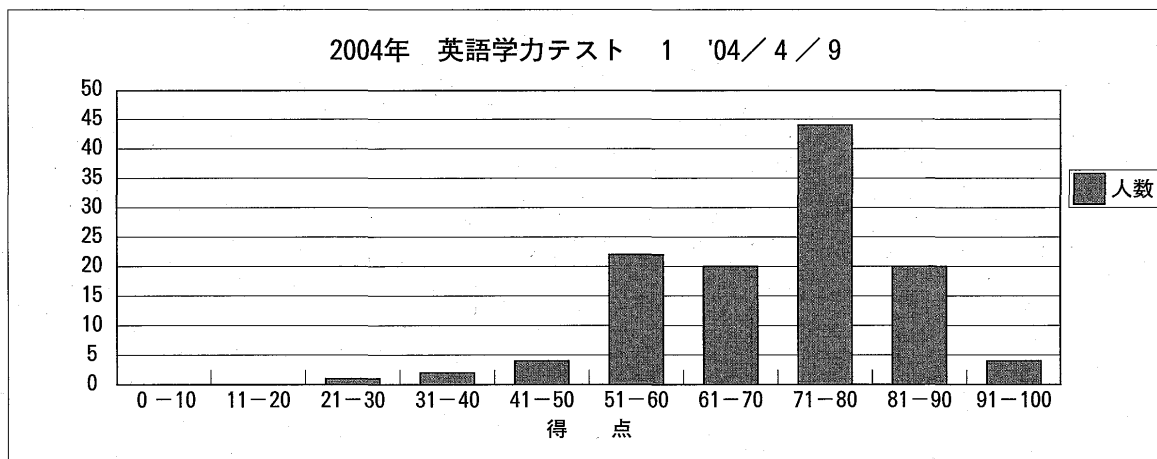
後期の最後の授業時間に4月に実施したプレ

イースメント・テスト (placement test) を再度実施した。2度目の試験はクラス分けが目的ではなく、一年間の学習指導の結果を測定するための試験であり、厳密に言うところアチーブメント・テスト (achievement test) である。2回目のテストの受験者は114名 (休学1名、忌引きやその他の理由で欠席3名) で、平均点は72.8点で、最高点は95点で、最低点は37点でした。英語学力テストの1回目と2回目を比較した場合、最高点、最低点、平均点において2回目の方が得点が伸びており、標準偏差は少なくなり、得点の分散が小さくなった。度数分布表としては、全体的に得点の高い方向へ移動した理想的な放物線状のグラフになった。

2つの得点分布表を見比べてみよう。4月の

段階では、大学の授業を十分理解できる学生と基礎力を補う必要のある学生の学力の格差があった。最低点27点から最高点93点までの得点分布の大きな山の中に、51-60点間で小さな山ができた。しかし、2回目のテストの結果、得点の低い21-30点間の学生がいなくなった。小さな山を作っていた51-60点間の人数が22名から8名に減少し、61-70点間の人数が20名から27名に約1.4倍増加し、頂上に向けて大きく右上がりの斜線になった。このように英語の基礎学力が向上し、英語力の格差が改善されたのは、一年以上に渡る英語基礎学力向上計画の成果と思われる。このような成果が得られた一つの原因は、学生の授業への出席状況が良いためである。秋田県立大学で毎学期ごとに FD (Faculty

プレイスメント・テスト	人数	最高点	最低点	平均点	標準偏差
英語学力テスト 1	117	93	27	70.4	12.8
英語学力テスト 2	114	95	37	72.8	11.5



Development) 活動の一環として実施している「授業に関するアンケート」によれば、前期のLL Iの授業への出席率が80%–100%の学生が全体の93%にもなっていた。5段階評価で学生のLL Iの出席評価指数は、4.60(全体の指数4.55)である。後期の総合英語 Iでは、出席評価指数は、さらに上がり平均4.68(全体の指数4.55)である。

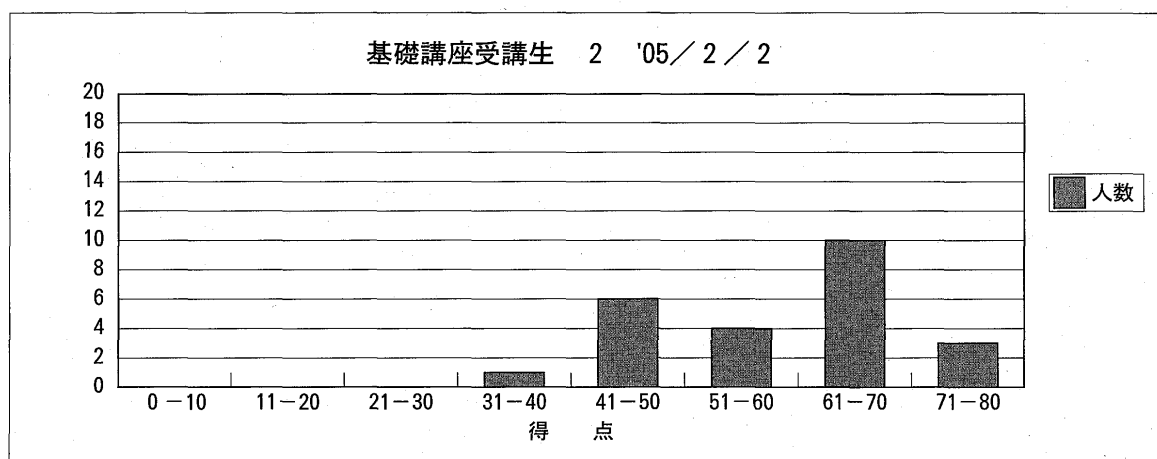
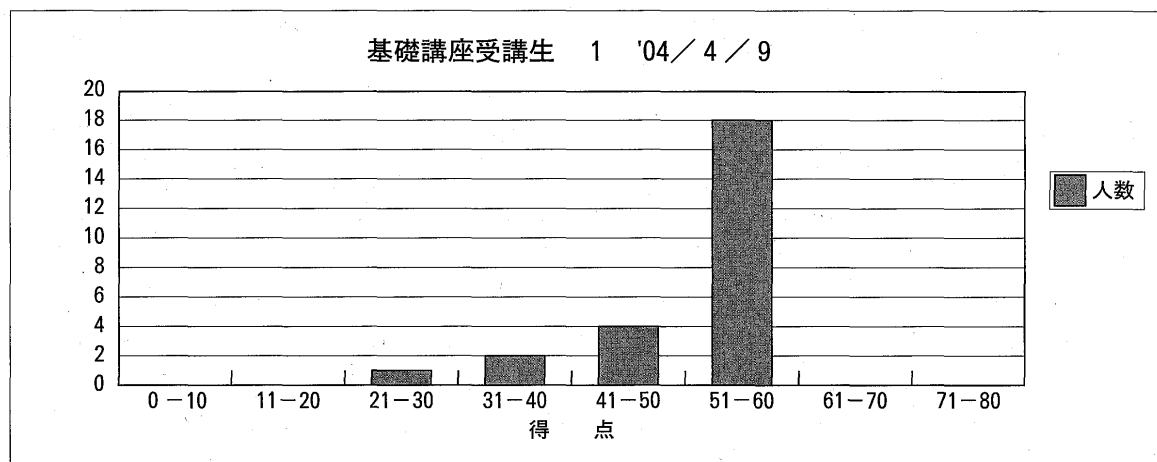
もう一つの理由は、女子学生が半数以上のために、勤勉な学生が多いことである。女性は一般に言語学習が得意であり、与えられた課題に真摯に取り組む傾向がある。そのような学生が教室に数名いることで、彼女らの積極的に課題に取り組む姿勢がクラス全体に波及しプラスの効果を生み出すのである。教員がいくら熱意を

持って指導しても学生の欠席が多く、学生に意欲がなければ成果は上がらない。教員が学習意欲のある学生に熱意を持って教室で指導することによって相乗効果が現れる。

### 3 基礎講座受講者の変化

前期基礎講座の受講者25名の得点の変化を見てみよう。4月のプレイスメント・テストの25名の平均点は100点満点の51点で、最高点は58点、最低点が27点、標準偏差が7.3でした。約10ヶ月後の2月のテストでは、全体的に得点上がり、平均点は100点満点の59点で、最高点は80点、最低点が37点、標準偏差が11でした。基礎講座受講生の半数以上が、58点の壁を2回

プレイスメント・テスト	人数	最高点	最低点	平均点	標準偏差
英語実力テスト 1	25	58	27	51	7.3
英語実力テスト 2	24	80	37	59	11



目の試験で超えて、61-70点間に10名の大きな山を形成し、71-80点間に3名の小さな山を作った。一年生全体の得点比較と基礎講座受講生の得点の比較では、後者の方に大きな得点の伸びが見られる。その理由は、英語基礎学力向上計画として入学以前から英語スクーリング（第一段階の指導）を実施し、入学後は小規模クラスでの前期と後期のカリキュラム外の英語基礎講座（第二段階の指導と第三段階の指導）のためと思われる。

一方、10名の学生が58点の壁を超えることができなかった。英語基礎講座受講生個人成績表によれば、その壁を越えられなかった学生の70%は、4月のプレイメント・テストを得点の低い順（昇順）に並べた時、10番目以内にいる。4月の試験で得点の低い学生Aは、2回目の英語学力テストでは20点も伸びたが、残念ながら一年生の必修科目のLL I、LL IIと総合英語 Iの単位を取ることができなかった。それぞれの科目の到達目標に達しなかった。この学生Aの場合は、前期・後期の英語基礎講座の欠席が多く、英語基礎講座担当の外部講師のこの学生に対するコメントは「欠席が多く、もっとやる気が欲しい」であった。学生Aとの面接から欠席の理由は、「英語が分からないから」ではなかったが、明確な理由を聞き取ることはできなかった。

次に10番目までの学生で、4月と2月の2回のテストの得点比較をした場合、マイナスが学生D、学生F、学生Iの3名、変化の無い学生Gが1名いる。彼らは一年間授業に出席したにもかかわらず英語力が下がったというより、標準誤差（standard error）によるものと判断できる。得点差が無かった学生Gは、前期の英語基礎講座をほとんど欠席しており、LL Iの評価は「不可」であったが、後期は休む回数が少なくなり、LL IIと総合英語 Iの単位を取った。基礎講座担当の外部講師のこの学生Gに対するコメントは、「力は備えているが、やや甘えがある」であった。

得点比較でマイナスになった学生D、学生F、学生Iは休まずに英語基礎講座に出席したが、必修のLL I、LL II、または総合英語 Iのいずれかの評価が「不可」であった。3人の学生は

それぞれの科目がシラバスで掲げている授業目標に到達することができなかった。県内の実業高校から入学した一人の学生は、必修科目2科目の単位をとることができなかった。彼は英語が高校1年生では必修科目であったが、2・3年生では選択科目であり、2年生の時には英語を履修しなかったと言った。高校時代の履修内容や履修時間の相違によって生じた英語力の格差を改善するには相当の努力がいるようである。英語基礎講座担当の講師の学生D、学生F、学生Iへのコメントは「基礎力がやや不足、基礎的な文法・語彙が不足、文法力が乏しく基礎的な語彙も不足している」であった。英語の基礎学力を補う必要のある学生には、学生自身が背負ってきた教育のハンディキャップを自分で克服する努力と教師側の時間をかけた適切な指導が大学全体で必要である。

資料③：英語基礎講座受講生個人成績表

英語基礎学力向上のための今後の課題は、それぞれの段階での指導を見直し、学生が意欲的に英語の予習や復習に当てる時間を多くするように工夫することである。大学で毎学期ごとにFD活動の一環として実施している「授業に関するアンケート」によれば、学生の授業のための予習・復習時間は少ない。LL Iの場合、一回の授業のための予習・復習時間が0.5時間の学生が28%であり、0.5時間以上が46%である。5段階評価でLL Iの予習・復習時間評価指数は、2.02（全体の指数1.84）であり、14項目の質問中最も低い指数である。後期の総合英語 Iでは、テキストが難しいためか予習・復習の時間指数が上がり平均2.56（全体の指数2.52）であるが、14項目の質問中最も低い指数であることに変わりはない。学生が与えられた課題に積極的に取り組むようにするための英語教授法や指導方法のさらなる検討が必要である。

資料④：「授業に関するアンケート」様式

#### 4 まとめ

最近の全国の国立大学学長への学力低下に関する新聞のアンケートによると、80%（89校中72校）の大学で「大学生の学力は低下している」

と回答していた。学生の学力向上への取り組みとして、初年次の教育に力点をおいて習熟度別授業や補習授業を実施している実例が紹介されていた。文部科学省の調べでは、国立大学の67%（89校中60校）で補習授業を実施している。大学入試センターの研究グループが、全国の国公私立大学の教員を対象にした「大学生の学力低下」の調査によれば、大学教員の6割が学力低下を問題視しており、学部別の調査によれば、理・工学部が最も深刻な問題になっていた。

国立大学がもはや「エリートの教育の場」だけではなくなりつつある状況がこの記事から読み取ることができる。大学への進学率が41%に達し、AO入試、推薦入試、一般学力入試などさまざまな選抜試験を通過して多様な学生が入学してくる今日、それぞれの大学卒業時の学生の「品質保証」、到達目標をどのレベルにするかでカリキュラム編成がきまる。大学における英語教育はいかにあるべきであろうか。

さまざまな学生が県内外から受験し、入学して来る地方の理系の公立大学では、英語という外国語の習得のみを重視して「世界的水準の英語力を目指す」英語エリートの育成を推進する訳にはいかない。学生の学力の低下や学生の英語力の格差に直面した場合、差別選別教育をすることなく、それを改善するための補習授業的な基礎学力向上計画をこれからも実施することが必要である。秋田県立大学は2006年4月から法人化されるが、学生の学力格差を改善することは、地域に根ざした大学の社会的責任(Corporate Social Responsibility)でもある。

※この論文は北海道教育大学での第31回全国英語教育学会札幌研究大会（2005年8月6日）で口頭発表したのに加筆したものである。

## 参考文献

- 文部科学省（2003）「英語が使える日本人」の育成のための行動計画 文部科学省ホームページ
- 羽鳥博愛 編集代表（1989）『英語指導法ハンドブック④評価編』 大修館書店
- 根岸雅史 『英語教育』（2005, July） 特集「評価」のゆくえ 大修館書店
- 金谷 憲（2004）「特集：大学の英語教育」『英語青年』 研究社
- 秋田県立大学英語グループ（2002）「教養基礎教育英語カリキュラム」（学長プロジェクト）
- 秋田県立大学FD委員会（2004）平成16年度「授業に関するアンケート」報告書
- 朝日新聞（2005）「国立大生学力低下防げ」5月22日
- 朝日新聞（2005）「大学生の学力低下」11月13日
- 高階 悟（2005）「日本における英語教育の課題」『秋田県立大学総合科学研究彙報』 第6号
- Robert P. Yagelski（2005）Stasis and Change *English Education* vol.37, NCTE

※資料①

### 第1回 スクーリング 英語確認問題

平成16年2月13日

氏名 \_\_\_\_\_

次の各分の ( ) 内の語句を、与えられた日本語の意味になるように並べ換え、下の解答欄に書きなさい。文頭語も小文字になっています、大文字にすべき語は直して書きなさい。

1. 私はパイロットで、彼は航空管制官です。 (a, an, am, and, is, air traffic controller, I, he, pilot).
2. 彼は朝食前に散歩をします。 He (a, breakfast, before, takes, walk).
3. 彼は昨日どこへ行きましたか。 (he, did, where, yesterday, go) ?
4. あなたは昨日この時間に何をしましたか。 (doing, what, this, were, you) time yesterday?
5. 私の妹は何をしたらいいのかわからないでしょう。 (know, my sister, will, to do, not, what).
6. 私は今日この仕事を終えなければなりません。 I (today, work, to, this have, finish).
7. 水を一杯ください。 Please (of, give, glass, a, water, me).
8. 私は彼女に英語の辞書を買ってあげました。 (her, I, an, bought, English, dictionary, for).
9. 私の父は朝から晩まで仕事をします。 (till, from, works, my father, morning, night).
10. 冬にこちらではどのくらいの雪がふるのですか。 (do, how, here, much, have, snow, you) in winter?
11. 犬はネコより役に立ちます。 (useful, are, than, cats, dogs, more).
12. あなたはなんてすばらしい本を書いたのでしょうか。 (a, written, book, have, what, nice, you)!

解答欄

- |               |                   |
|---------------|-------------------|
| 1. _____ .    | 7. Please _____ . |
| 2. He _____ . | 8. _____ .        |
| 3. _____ ?    | 9. _____ .        |
| 4. _____ ?    | 10. _____ ?       |
| 5. _____ .    | 11. _____ .       |
| 6. I _____ .  | 12. _____ ?       |

※資料②

### Book Report (LLI)

Akita Prefectural University, Faculty of Bioresource Sciences

Depart. \_\_\_\_\_ No. \_\_\_\_\_ Name \_\_\_\_\_

• Title:

\_\_\_\_\_

• Author

\_\_\_\_\_

• Level 1, 2, 3, 4 Stage 1, 2, 3, 4, 5, 6 Step 1, 2, 3, 4 Grade 1, 2, 3, 4

Starter, beginner, elementary, intermediate, upper,

• Summarize the story : (日本語で)

\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

• Your Comments : (日本語で)

\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

• This book was: a) too easy for me b) at a good level for me c) too difficult

• New vocabulary and idioms

\_\_\_\_\_

Date: \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日



※資料③

英語基礎講座受講生個人成績表

前期受講者25名（4月試験結果の昇順）  
後期受講者13名

番号	学 生	2月スクーリング・テスト	2004, 4月テスト	2005, 2月テスト	得点比較	基礎講座：前・後 (欠席回数)	前期：LL I	後期： 総合英語	備 考
1	A	7	27	47	20	前(7)・後(10)	再：不可	再：不可	LL II 不可
2	B	7	39	56	17	前・後	単位取得	単位取得	
3	C	欠席	40	47	7	前・	単位取得	単位取得	
4	D	2	42	37	- 5	前・後	再：可	再：可	LL II 不可
5	E	欠	45	63	18	前・	単位取得	単位取得	
6	F	7	46	45	- 1	前・後	再：不可	再：不可	
7	G	欠	48	48	0	前(12)・後(2)	再：不可	再：可	
8	H	-	51	70	19	前・	単位取得	単位取得	
9	I	4	52	43	- 9	前・後	再：不可	再：可	
10	J	8	53	67	14	前・	単位取得	単位取得	
11	K	7	54	55	1	前・	単位取得	単位取得	
12	L	4	54	60	6	前・後	再：可	単位取得	
13	M	9	54	65	11	前・	単位取得	単位取得	
14	N	-	54	65	11	前・	単位取得	単位取得	
15	O	9	54	71	17	前・後	単位取得	単位取得	
16	P	11	55	52	- 3	前・	単位取得	単位取得	
17	Q	-	55	62	7	前・	単位取得	単位取得	
18	R	-	55	73	18	前・後	単位取得	単位取得	
19	S	7	55	-	-	前・後	再：可	-	休学
20	T	7	56	61	5	前・	単位取得	単位取得	
21	U	-	56	65	9	前・	単位取得	単位取得	
22	V	7	57	67	10	前・	単位取得	単位取得	
23	W	8	58	45	- 13	前・後	単位取得	単位取得	
24	X	-	58	70	12	前・	単位取得	単位取得	
25	Y	-	58	80	22	前・後(9)	再：可	再：可	
26	Z	7	(59)			・後	単位取得	単位取得	
	平 均	6.9	51	59					
	最 高 点	11	58	80					
	最 低 点	2	27	37					
	標準偏差	2.1	7.3	11.0					

※ 再は再試験受験者  
数字の太字は58点未満

※ 資料④  
履修科目名

平成16年 月 日 実施

秋田県立大学 授業に関するアンケート (表面)

マーク記入例

良い例	悪い例
●	∅ ○ ⊖

授業改善に役立てますので、次の項目について率直な意見を聞かせてください。  
貴方の意見に最も良く当てはまる番号の○を塗りつぶしてください。

学部を教えてください	a システム b 生物資源 c その他
学年を教えてください	a 1年 b 2年 c 3年 d 4年 e その他
学科を教えてください	a 機械知能 b 電子情報 c 建築環境 d 経営システム e 応用生物 f 生物生産 g 生物環境 h その他

I. この授業に対するあなたの取り組みについて

1. あなたの出席率は何%でしたか  
a 100%      b 99%~80%      c 79%~60%      d 59%~40%      e 39%以下
2. あなたの受講態度はどうでしたか  
a 非常に良い      b 良      c 普      通      d あまり良くない      e 良くない
3. あなたのこの授業のための予習や復習時間は1回当たりどの程度でしたか  
a 2時間以上      b 1.5時間以上      c 1時間以上      d 0.5時間以上      e 0.5時間未満

II. 授業内容・授業方法について

4. 授業の意義を十分理解できましたか  
a 十分理解できた      b 理解できた      c どちらともいえない      d あまり理解できなかった  
e 理解できなかった
5. 授業の内容が十分理解できましたか  
a 十分理解できた      b 理解できた      c 普      通      d 少し難しかった      e 難しかった
6. シラバスが授業の選択と学習に役立ちましたか  
a 大変役立った      b 役立った      c どちらともいえない      d 少し役立った      e 役立たなかった
7. 授業の進む速さが適切でしたか  
a 適      切      b まあまあ適切      c どちらともいえない      d やや速かった      e 速かった
8. 教員の話し方が適切でしたか  
a 適      切      b まあまあ適切      c どちらともいえない      d やや不適切      e 不適切
9. 教員は学生の参加(質問・発言など)を適切に促しましたか  
a 適      切      b まあまあ適切      c どちらともいえない      d やや不適切      e 不適切
10. 白板や視聴覚機器(OHP、プロジェクターなど)の使い方が適切でしたか  
a 適      切      b まあまあ適切      c どちらともいえない      d やや不適切      e 不適切  
f 使用しなかった
11. テキストや補助教材が効果的に使用されましたか  
a 効果的だった      b やや効果的だった      c どちらともいえない      d あまり効果的でない  
e 効果的でない      f 使用しなかった

III. この授業の全般的印象について

12. この授業に興味を持って参加しましたか  
a 非常に興味を持った      b 興味を持った      c どちらともいえない      d あまり興味が持てなかった  
e 興味が持てなかった
13. 教員の熱意が感じられましたか  
a 大いに感じた      b 少し感じた      c どちらともいえない      d あまり感じなかった      e 感じなかった
14. あなたはこの授業を総合的にみてどう評価しますか  
a 非常に良い      b 良      しい      c 普      通      d あまり良くない      e 良くない

★ 裏面にも記入してください。